

あの・なはん

No.88

あの・なはん 盛岡弁で「あのねえ」と呼び掛けることば

【問】男女共同参画青少年課 ☎626-7525

いまこそ

「働き方」・「暮らし方」

を考えよう！

少子高齢化が進み、高齢者をはじめ支えが必要な人が増え、支える現役世代は減少。「仕事」と「家庭生活」のさまざまな課題を一人で何役も担わなければならない人が増えてきます。仕事と生活を両立できる社会を実現するため、一人一

人が意識を変えることや長時間労働を当たり前とする男性中心の働き方を変え、誰もが働き続けられる環境を整える努力が求められています。

今号では、私たちの「働き方」・「暮らし方」について考えます。

意識の変革を進めよう！

多様な事情があっても働き続けられる「働き方」

育児や介護などをしながら働く人が増えています。今後、さまざまな理由で働く時間に制約がある社員が大半となり、「時間を気にせずいつでもどこでも働ける」社員は少数派になるといわれています。会社にとっても大切な社員が働き続けられるためには、長時間労働が当たり前という認識を見直し、社員全員のワーク・ライフ・バランスに配慮した取り組みをすることが大事。また、柔軟な働き方が可能になると、病気や障がいなどの事情で長時間働くことが難しい人や女性、高齢者が活躍できるようになります。

家事・育児を男女が共に担う「暮らし方」

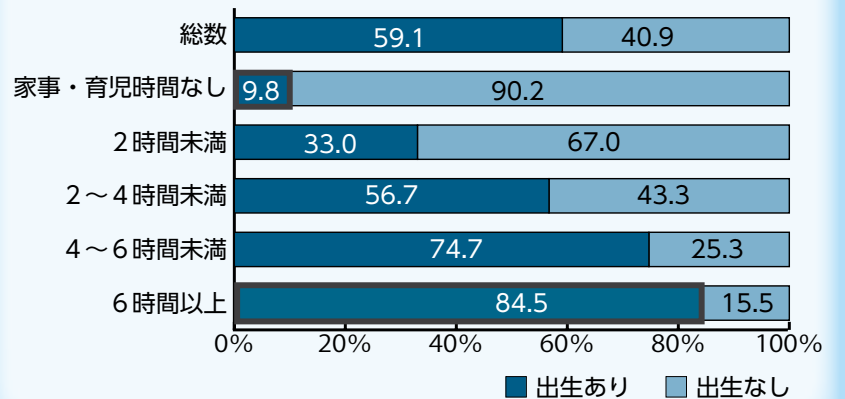
国の労働力調査によると、昭和55年と比べ、平成27年は専業主婦のいる世帯が半減し、共働き世帯は倍増。夫婦が協力し合い、手分けをして家事育児に関わる「共働き子育て」が必要な時代となっています。にもかかわらず、日本の男性が家事や育児などに関わる時間は諸外国と比べ極めて短いといわれています。「社会における女性の活躍」と「男性の家庭活躍」は表裏一体の関係です。男性も家事や育児などを「手伝う」のではなく、対等なパートナーとして、責任を持って主体的に「共に担う」意識が大切。長時間労働により仕事中心の生活を送っている男性も仕事以外の経験をすることで、仕事と生活の質を向上させることができます。



男性の家事・育児への参画で変わる出生状況

夫が子どもと関わる時間が長いほど、第2子以降が生まれる割合は高くなっています。夫が家事や育児などをする時間が「なし」の場合は9.8%に対し、「6時間以上」では84.5%と正比例しています。

子供がいる夫婦の夫の休日の家事・育児時間別にみたこの12年間の第2子以降の出生状況



資料：内閣府「平成28年版少子化社会対策白書」
厚生労働省「第13回21世紀成年者縦断調査」（2014年）より

寄稿



NPO法人ファザーリング・ジャパン東北/理事/岩手代表

後藤大平さん

NPO法人ファザーリング・ジャパン

「よい父親」ではなく「笑っている父親」を増やすことを目的に、父親支援事業としてパラスクールやイクボス養成事業、絵本読み、パートナーシップ醸成など、さまざまな事業を行っている。東北では支部として「ファザーリング・ジャパン東北」を中心に活動中

男性だって仕事も育児も楽しみたい！

大事な物って、個人個人違いますよね。僕にとっては、仕事も子育ても趣味も、全部が大事。人生は一度きりです。せっかくなので全部欲張りしたいと常々思っています。いわゆる「イクメン」という用語も、これまでの「男は仕事・女は育児」から脱却して、「俺も仕事も育児も楽しみたい！」という声が潜在的に大きかったからこそ、ここまでのムーブメントになったのだと思います。

一方で、月60時間以上の長時間労働率が高いのもちょうどその世代の男性。岩手ではこれに加えて、男性の自殺率や脳疾患の発症率も高いです。講演をしていると、たくさんのパパから「自分ももっと子育てに関わりたのに…」という声を多く聞きます。男性が子育てに参画すると、子どもの成長はもちろんのこと、妻の負担も減りますし、

子育てで得たさまざまなスキルが仕事にも生きます。地域に顔を出す機会も増えるので、家と職場の往復だけでは得られないつながりを得ることもできます。そして、そんなパパママが集まる組織は活性化し、視点も多様化し、優秀な人材も集まりやすくなります。そのカギとなるのがイクボス★や働き方改革。子どもたちの世代に今ある課題を残さないため、僕ら世代でイクメンやイクボスを死語にしてしまいたいですね。

★ ファザーリング・ジャパンが平成26年に提唱。職場で共に働く部下・スタッフの仕事と生活の両立を考え、その人のキャリアと人生を応援しながら、組織の業績も結果を出しつつ、自らも仕事と私生活を楽しむことができる上司のことを指す（対象は男性管理職に限らない）

日本女性会議2016秋田 に参加して感じたこと

男女共同参画推進リーダーの育成を目的として、28年10月28日～30日に開催された「日本女性会議2016秋田」に市民3人を派遣。3人が参加して気付いたことや感じたことを紹介します。

アサーティブネス（積極的な自己主張）の勧め

女性が社会参加する中でありがちな、自分を出さず相手や周りに合わせる非主張的な言動により、家庭や職場、地域で人間関係に傷つき振り回されることがあります。自分も相手も尊重しながら「自己主張」し「対話」ができるコミュニケーション力は大事。自分の感性や個性、能力を發揮し、社会の中で活躍していくためには、自分の意見や気持ちをその場に適切な言い方で表現する「アサーティブネス」が役立つということを学びました。「アサーティブネス」の考え方や行動の仕方は、学習で身に付けることができます。このようなコミュニケーションは女性が活躍しやすくなるヒントにもなり得ると実感しました。

「アサーティブネス」は精神医療・保健看護でも活用され、さまざまな場面で必要とされているそうです。普段の生活や日頃の活動の中で、できる限り心掛けて暮らしていきたいと思います。



三浦由紀子さん

分科会「女性の活躍を進めるために必要なこと、困難なこと」に参加

支えたり支えられたりする 双方向の人間関係

高い高齢化率や低い出生率、急速に人口減少が進む秋田県において、「自分も大切、あなたも大切」を基本としたケアリング（気遣いあう）マインドを持ってまちづくりに取り組んでいる3人から発表がありました。その中で、支援する人と支援される人という一方通行ではなく、それぞれができる形で社会参加をすることが大事ということを再認識しました。例えば、体を動かすことでは支援の必要な人がパソコン技術では教える側になったり、高齢で身の回りのことに支援が必要な人が子育てではアドバイザーになったり。人にはいろいろな側面があり、できることとできないことがあって良い。その人ができることを大切に、いろいろな角度から見えていく意識を持つことやお互いにその立場が変わり得る双方向の人間関係が重要だということを感じました。

女性会議全体を通して「参加」ではなく「参画」という言葉が当たり前のように使われることに気付き驚きました。今の私にとっての「参画」は学びを実践に移していくこと。参加して終わりではなく、どうやって次につなげていくかを考え行動していきたいです。



佐々木裕子さん

シンポジウム「秋田発「ケアリング（気遣いあう）」社会をめざして」に参加

チャレンジすることの大切さ

全国的に高齢化率が高い秋田市は、エイジフレンドリーシティ（高齢者にやさしい都市）の実現を目指しているそうです。高齢者が「支えられる人」ではなく、「支え手」としていきいき暮らすことができるまち、暮らしやすい社会に向けた取り組みを進めていると聞き、社会全体で高齢者のことを考えているのだと感じました。

秋田銀行は、高齢者が生徒になったり先生になったり立場を変えて学びあう場「あきぎん長活（ながい）き学校」を開校しています。「学びたい」という気持ち、それが「長活き」の秘訣とことから、高齢になってもチャレンジする行動が大事だということを学びました。活気があふれ実践に満ちた話を聞き、これからは受け身ではなく、みんなで参加し、意見を出し合い、考え合って、活気あふれる「今」をつくっていききたいと思います。



田村依江さん

分科会「ともに生きる喜びをはぐくむ高齢社会」に参加

報告会を開催しました

日本女性会議に参加した3人からの報告会を1月24日に行いました。会議で得た学びと気付きを共有する貴重な機会となりました。会場からは多くの人に伝えたいという意見が出されました。



講座情報

大切なわたし 大切なあなた

「いじめ」、「虐待」、「暴行」、若いパートナー間で起こる「デートDV」はどれも**人権侵害**です。このような悲しい出来事を無くすためには、早い時期からの教育が必要。また、対等な関係を築くコミュニケーション方法を学ぶことも大事です。

もりおか女性センターは、尊重し合える人間関係づくりや人権意識をつくり上げていくことを目

指し「人権講座」を実施しています。同センター職員による講義や大学生・専門学校生などで構成されたデートDV予防啓発グループ「I & Y」によるオリジナルの寸劇などで分かりやすく伝えます。詳しくはもりおか女性センター ☎604-3303 にお問い合わせください。

【対象】 中学～大学生など

【費用】 無料



過去の出前講座の様子